

み言葉は

いのちの言葉

マタイ 23,8

あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟である

「『神でありながら人となられたイエスの内に、真理そのものが受肉しているのに、なぜ別のところにそれを探すのか。真理が私たちを魅了するのなら、何をおいてもイエスご自身を探し求め、イエスに従わなければならない』とわかった」と、キアラ・ルービックは、若いときの経験を語っています。

真理を探す

キアラと仲間たちは福音書を読み始めました「イエスの言葉はどれも神聖で、人の心を惹きつけてやまない、比類のない永遠の言葉、過去のものでも、単なる思い出でもなく、あらゆる時代と場所に生きる人間一人ひとりに向けられた普遍の言葉でした。」

本当に私たちの師はイエスでしょうか？

現代では、様々なライフスタイルが提唱され、思想の師と呼ばれる人たちが大勢います。イエスの言葉には、哲学者や政治家、詩人の言葉にはない魅力と深みがあります。なぜならそれは「いのちの言葉」、私たちの人生を満たしてくれ、神のいのちそのものを伝えてくれる言葉だからです。

経験を分かち合う

「いのちの言葉」を一緒に読んでみましょう。イエスの名によって集う人たちの間におられる、復活されたイエスが、どうみ言葉を実践したらよいかを教えて下さるでしょう。そして経験と恵みを分かち合ってみましょう。キアラは初期の頃に起こったことについてこう語っています。「経験したことを分かち合わなければならない、と強く感じました。“与える”ことによって経験は私たちの内に残り、内面的に豊かにされました。逆に、分かち合わなければ魂は活力を失い、乏しくなっていました。こうして一日中熱心のみ言葉を生き、その実りは私たちの間だけでなく、後からグループに加わる人々にも分かち合われていきました。それは、「私」あるいは「私たち」がみ言葉を生きるというよりも、むしろ、私もしくは私たちのなかでみ言葉が生きておられる、という体験でした。そして、私たちを通してイエスご自身が、その実りとともに周りの社会を変えていかれました」とキアラは語っています。

いのち

クリスティーナ(イタリア)

暗い気持ちで味方も暗く

月曜の朝から、一週間あまり調子がよくありません。誰も私のことをわかってくれないのです。私の支えになる人はなく、私の味方はだれもいないように感じました。

私がなにかをしたり、言ったりすると、必ず誰かが反感をもっているとわかっています。

毎日空しく、今まで素晴らしいと思ったことも、色失せて見えました。暗い気持ちで味方も暗くなりました。

日曜にゴミサに行き、そこで本当の光がなくなっていたのに、突然気が付きました。それは神様のみ言葉で、それこそ私に必要なものでした。

その一週間いつでもみ言葉は私の中にあっただけけれど、私がいかに心を開いていて、悲しみに沈んでいたのか、み言葉をきくことも、イエス様が私のうちに入らないようにしたため、神様のみ心を行うことができなかつたのです。

神様とのこの出会いによってまた生きる力を取り戻せたことをとてもうれしく思いました。み言葉に耳を傾け、心のなかにそれを感じることもまたできるようになり、毎日生きていく力をもらいました。喜んで神様のみ心を受け入れ、神様の愛は一人一人にとって限りなく、神様が愛してくれるのを拒んでいる時でさえ絶え間なく愛してくださいることを皆にあかしたかったです。この経験からいただいた力でわかつたのは、いのちの言葉を一人のクラスメートに対して生きなくてはならないということでした。彼女は理由なく私におこり、いやな態度で返事をするようになっていました。最初は私も同じように答えていたのですが、そうすると、彼女は信じていないけれど、彼女の中のイエス様を愛していなかつたのに気が付きました。それで、神様の愛はどれほど素晴らしく、深いものであるかを知ってもらいたかったので、2倍愛そうと決心しました。

私たちが必要な光:いのちの言葉